

# 童話

室生犀星

青空文庫



「お姉さま、——」

小さい弟は何時の間にか川べりの石段の上に腰をかけ、目高めだかをすくつている姉に声をかけた。

「お前、いつの間に来たの、こちらへ来ると危ないわよ、わたしすぐ足をふいて行くから。」

姉は慌てて今まで流れにひたしていた足をふいて、拭いていながらも自分と同じい顔をしている弟を見て、そして四辺あたりに誰もいないのを見定めると、石の段々をあがった。道路から二段目のほ

かほかした日あたりに、足を鞞鞞ぶらんこのように下げている弟のそばへ行き、そして肩の上に手を置いた。

「沢山捕れたの。」

「いいえ、ひとりだから駄目よ、二人だと手拭を両方から持つて居れば沢山捕れるんだけど……お前よく来られたわね。」

小さい弟は微笑わらっただけで別にそれについては返辞をしなかった。顔いろの悪いのはこの前会ったときと同じかった。

「みんなお達者、——」

「ええ、みんな……。」

姉は弟にならんで石段の上に腰を下ろした。石段に猫じやらしの穂が一杯に伸び一番下の段に美しい水が機嫌よくながれていた。

瀬すじの優しいところに列ならんだ目高が二人の話声が水面に落ちるころには、驚いて神経深く乱れた。ふたりは殆ほとんど大人のように黙り合っていた。

「お前この前のときより瘠せたようだわね。肩なんかこんなにつこつしているんだもの。」

「そうか知しら？」

「手だってほら細くなっている、——ふるえているのね。寒いのに。」

「いや、寒くはないんだ。すこし暑いくらい、——」

「それならいいけれど……。」

弟はしばらく対岸の茫ぼうぼう々たる崖の上をながめていたが、ふと、

自分でも思いがけないような声音こわねで言った。

「きようお母さまに会ったよ、ご門のところね、八百屋が来ていて何かを買っていらした、僕、気のせいかな知らんけれどお母さんも瘡せたように思う、お姉さま、そう思わない……。」

「そうね、すこしお瘡せになったのね、けれどもお父さまほどじやない、お父さまときたらすっかり瘡せてしまったのよ、お気の毒よ。」

姉は弟に遠慮するような声で言った。「お母さまに何か言ったの。」

「いいえ、いつもの通り黙って来てしまったのです。車のかげからぬけて来たの。でもこの段々のところに行っていたときに、こ

ちらをちらりと見なすつた、しかし分りはしないんだよ。」

弟はそういうと沈鬱ちんうつな顔貌で微笑つて見せた。姉はその顔を何時ものように不思議そうにながめ、なぜか身内に冷たい汗のようなものを感じた。しかし不快な気もちではなかった。何か静かすぎるときに感じるしんとした寂しい気もちによく似ていた。

「そのときお母さまの肩がすこし尖っていたような気がした。」  
姉はわらつて肩の手をつよくしばりつけて言った。

「お前、まるで大人のような口をきいているのね。お前のようなふうになると、考えることがそんなに大人じみてるのか知らず自分でそんな思わない？——」

「べつにそんな気がしないよ、ただ、お母さまがあまり可哀そう

な気がしたただけなんだよ。」

「ではなぜ逢わないの？——」

姉は鋭くそう言ったものの、弟がすぐ鬱ふさぎ込んでしまったので、こんなに言わなければよかつたと考えた。弟だつて母にあいたいのであろう、それ故に門の前を通つたりしたのであろう、姉はそう考えると姉さんがすこし言いすぎたのね、気にかけないでくれと優しく言い和なだめた。弟はしずかに嬉しげにしくしく泣き出した。そして毎日のようにうちの前を通るのだが、ときとすると家中を覗き込んで見ることがあると、弟は低い声で言った。

「このごろ晩は行燈あんどんを玄関にともしていらしゃるのね、通りからそれがよく見えるの。」



「ええ、電燈がないものだから、それに行燈というものは妙にさびしい心もちになるものね。」

「けれども僕好き、——」

「妙なものが好きなんだね。わたし何なんだか白はくつぽくぼんやりして点ともれているのが寂さびしくてしかたがないの。お前の好きなわけがわかるんだけれど……。」

弟むしは られたような淋しみしい顔をした。そして、ほら向う川岸の崖のところから、川をへだててその行燈のあかりだけが何時もよく見える……と言いった。姉は崖の方をながめた。石白く茫々たる積かわららの草も末枯れて茜色に染まり、穂のあるものはとくに穂を吹かれてしまった蕭しょう殺さつたる景色であつた。冬が起き上つたよう

な物憂い寒々した腰つきが、川原一杯に感じられた。

「お前、冬になつてもこうやつて訪ねて来られる……。」

「ええ、いつでも——。」

「雪になつてもかね、山をごらん、遠いのもう白く幾すじも光つてみえるでしょう、あれが一日ずつ数を殖して、しまいには山のあたまの地がまるで見えなくしてしまふんだよ。それでも来られる……。」

「大丈夫来られる……。」

「そう全くふしぎね。」

姉は山をながめた瞳を弟に向け、弟に向けた瞳をまた山の上に向けた。遠い山の前に近い山があった。遠い山に齒しろのような皓い

縄のように雪が縋よれかかり、前の山は暗い茜にそまって秋のままの姿だった。姉はそれらの景色と弟とが関わりがあることを知っていたが、どういうふうに関係があるかが解らなかつた。なお一段とよく分らないのは何故小さい弟が自分だけに逢いにくるのか、ふしぎな気がした。しかもこの石段のところに腰かけているときに、全く上から二段目のところに弟はいつもどこからか遣つて来て、微笑つてしずかに腰を下ろしていた。足はいつもきちんと揃つて、すこし口をあけ可なつか懐しげな顔つきをしていた。

「川原の中に小みち径があるでしょう、だんだん曲つて向うの崖の上の道路へ出るようになってるのね、わたしあそこを見詰めてみると、きつとお前がやって来そうなところだと思ふの。なんだか

しよつちゆうお前はあんな石の白い川原の小径をあるいているよ  
うな気がしてならないの、お前の歩いてくるところはそんな小径  
と違いはしない？——」

弟は黙つて微笑つていた。その表情の中には大人のような固い、  
皮のある微笑<sup>ほほえ</sup>みが凍<sup>い</sup>てついで見えた。姉はそれをまじまじ珍らし  
いもののように眺めた。そして弟は<sup>い</sup>たい幾つくらいの顔をして  
いるのだろうかと考えて見るほど、普通の子供とは変つたところが  
際立つて見えた。

「お姉さまはいつでもそう思つて川原をみているの。それともお  
前はあんなところを通りはしないの。」

「うん、通らない。」

弟は短いこれだけの返辞をして、何も尋ねてくれるなどというよ  
うな顔をした。姉にもそれがよく分つていたが、反対に考えるほ  
ど解らないことだった。そして今きゆうに向うの方から洗濯物を  
しにくる女らしいのが一人、重い籠を抱えてくるのが見えると、  
小さい弟はそれを憚るはばかように見つめた。あるかないかくらいものの物  
怖のおじしている様子が、弟の眼の中に震えているのを姉は見入った。

「お姉さま、——」

弟はそう呼んで注意した、姉は弟の手をひいて川ぶちの土手の  
上をあるいた。土手の石垣のあいまの、日あたりのよい穴から遅  
い冬咲く花があつた。白い粟粒くらいの花だった。雪がくると咲  
いたまま押し花のように凍てあがつた。ふたりはそういう石垣の

あいまを覗いてあるいた。が、その他には筋のこわい枯草が毎夜の風に吹き荒まれ笛のようにならからになつていた。生き残つている蝗いなごはみんな跛びっこを曳いて間もなく死ぬだろうと思えた。

「わたしお前とあるいている間はいいんだけれど、お前がいなくなつてしまつたあとが、何時でも気が滅入り込んでしまつて困るの。」

弟は黙つて土手の上の草に手を触れながら、姉の言うことを考え考え歩いた。「それに妙にお前がやつておいでの朝はせかせかせた落おちつき着がない気もちになつてすぐお前が来るといふことが分るわ。よく鳥のかげが家のどこかにさすと誰か珍らしい人が来ると言うわね。ちようどあのときのようにわたしにはお前がくると

きは、朝のうちにも何も彼もわかつてしまうの。そんなときはまるで嬉しくて仕方がないものだから、この子はどうしたんだらうつてお母さまが仰るくらいなんです。だからわたしきようはいい事があるんだと言っておくの。ほんとにふしぎね。そんな日は決ってお前は石段のところいつものようにきちんと坐つて待っているんだもの。どうしたの。そんなに黙つてき、お前だつてそのときは嬉しいのだらうね。そりやわたしと同じだらうからね。」

弟は唯何も言わないで歩いていった。

かれは石段のところから二町ほど上流の、灰色つぽい木橋の袂まで来かかっていた。長い木橋の、灰ばんで横わつている姿は、枯れた川原の草の上に蕭条として架つていた。その橋の上流

は藪につづいた外は、一いちぼう望の白い石ばかりの川原と土手との続きであった。かれら姉弟は橋の袂にぼんやり佇たちつくしていた。そのうち弟はひとりだけ姉のそばから隔はなれた。いつものようにそういう時はすげなく見えたが、姉はべつに不思議そうにはしなかつた。

「もうおかえり?——」

「ええ。」

姉は二三歩寄りそうて、親しそうに手をとって言った。

「こんど何時くるの。」

「いつでも、——」

弟はそういうとすたすたと草履ぞうりの音をさせながら歩き出した。



姉はいつも弟のうしろ姿を見送らないことにしていたので、これも背後姿を見せながら下流へ向って歩き出した。うすれた日かげはそれきり冬近い日没の色に変わってしまった。

## 二

お俊は眼をさますと慌てて川べりへ出て見た。対岸の崖の上としに今夜三つ灯がともれているばかりだった。暗夜の茂をながれる大河の音が一時に耳もとに襲うた。お俊はいつも対岸に四つの灯が見えるとき、又、二つの灯が点ついているときと、また今夜のように三つに見えることとあるのを、気に留めた。どうして灯の数が

晩によつて殖えたり少なかつたりするのが分らなかつた。お俊はすぐ居間へ這はい入つてきよ子の寝顔を見つめ、穏やかなその顔をしずかに撫でてやった。この子はあんな風にしてあの子に逢つてい  
るのか知らと思つてみたが、そんな事はあり得べきことでない、  
——お俊は自分でそういう心を真直ぐにして見たが、小さい二人  
が石段のところに坐つて肩を組んでいる姿が、まだ、こと新しく  
頭の中にうつつていて、一いっしよにお俊の方を向いて何か話したそ  
うに見えてならなかつた。お俊の考えを押し広げると子供同士の、  
窺い知ることのできない世界に二人が何かを囁ささやいていることが、  
ありそうな事にも思われなくてもなかつた。

それに不思議なことにはきよ子は何時も石段のところで遊んで

いることだった。子供というものはああいう危ないところが好きなものではあるが、きよ子は決つてそこに腰をおろしていた。弟もやはりそこにしゃがんで遊んでいたのに、お俊は気もちの中にときおりがくぜん愕然として何物かに衝かれたような氣になつて、きよ子の姿を見た。

「あそこがどうして好きなの。段々のところは危ないじゃないかね。それよりか土手の上になさい。」

お俊はそう言つてきよ子を土手の上へた拉れてくるのだが、きよ子はべつだん母親に抗うこともなく従順に尾ついてきて、土手の上であそぶのだった。が、しば暫らくすると何時の間にか石段の上に坐つていた。定つたように二段目で、何かつれにおいてきぼりを食

わされたように寂しそうに或るときはむしろ寒そうな姿をしていた。

「ええ、わたしあそこが好きなの。腰かけよくできているんですもの。それにあそこは暖かいです。」

「おかしな子ね、あそこへお友だちなんかも入らっしやらないじやないかね。お母さんはあんなところは危なくてきれいなんです。」

「でも仕方がないわ、わたし好きなんだもの。」

その日はどうしたのか平常と違って頑固にそう言い返しをして、ちらりと横を向いてしまった。お俊は悸然きぜんとした気もちだった。

ふと気を変え、自分の心の暗みを手さぐるような気で、こう言っ

てさぐりを入れて見るようになった。そんな事がこの子にわかり  
そもない事は知っていながら、自分の頭にあることに謎かけて  
見ずにいられない別段な淋しい気もちになった。

「あそこでお前だれかを待っているのじゃない？ お友だちとか  
誰かをね、それであそこにいるのでしよう。」

「いいえ、そんなことはないわ、ただ、あそんでいるだけなんで  
すの。そんなに悪けりやあたしあそこへもう行かないようにする  
からいい……。」

きよ子は又横を向いて了<sup>しま</sup>った。

お俊はそれ以上尋ねるのがよくないと思って黙ってしまった。

お俊は何かこの子供のあたまにも自分の見た夢と同じいものが絶

えず、頭の中に動いて、その動いている方へ惹かれていたのではないかとも思ふた。きよ子の性質として妙に大人じみた考えをよく話し出すことをお俊は氣に煩わづらつていたから、——お俊は最もう一度たずねて見た。

「お前があそこに坐っていると誰かが、お前の知っている、一番仲のいい子が来るような氣もちになるのじゃない？——お前がそれをちゃんと知っているのじゃないか知ら？——」

お俊はそう言つて自分らしくもないと思つて赧あかくなつたが、きよ子はべつに何も思つていないらしく呆ぼんやりとしていたが、ふと、こんなことを言つた。

「貞さんがね、お母さま、——」

お俊は冷たくなつた。そして「貞さんがどうしたの。」と問い返した。が、きよ子はそれ以上何も言わなかつた。お俊はそれを問ただい糺すことが恐ろしいような気がした。眼底を去らぬ姉弟の姿があつたから、――

「いまごろあの子のことなぞ言い出すものじゃありませんよ、妙な子ね、お前は？　それだから神経質だつて言われるのよ、もう、そんな事は言つこなし……ね、よく分つているわね。」

「ええ、そりや……。」

お俊は急に心が重く鬱し出した。

しかも今寝ぎめの頭にまだ浮んでいる川原の土手を行く姉弟の姿が、このきよ子の寝顔をみているうちにぼんやりと浮んで見え

た。

かれら姉弟はいつも二人揃って、二人とも赤いジャケットを着て、同じ色の帽子をかぶり、姉はすこし大きい靴をはき、弟はすこし小さい靴をはいて、日のこぼれた道路をよく歩いていた。お俊はそういう可憐な姿が右と左との手に重りかかっている夜の町へ能く買いいものに出かけた。二人には同じいものを買ってやった。どうかすると両方から押すのでお俊はどうかすると二人のために足をすくわれるような、危ない足取りをさせられた。お俊は楽しげな可笑しい気もちになり、よく二人に言った。

「押さないで頂戴、お母さんが歩けはしないじゃないの。」

姉弟はそう言われると五寸くらいずつ、間隔を置いてあるいた



が、すぐ又足をふみつけるほど何かを話すたびごとに押しよせて来たりした。お俊はしかたなしに二人に揉まれて歩いた。——お俊は両手にかんじるともない重みをきよ子の寝顔を見つめているうちに感じた。お俊は溜息をついてこの頃は平気になって眺められる写真を鏡台のところへ行つて眺めた。眺めるだけで心に落着きが来るのだつた。あきらめ切つたところがそういう写真の中の現実をほんのしばらくの間、正確にお俊の眼の中にとどまらせたからであつた。お俊は日が経つごとに忘れて行くという人の言葉が、反対の意味で忘れなかつた。何か肝心の一つのもの、笑顔や言葉や足つきだけが眼に残つた。風呂場へはいると手に足がかんじられた。丸い足に石鹼をつけて洗つてやったことが、殆ど、

毎日のように頭をそっくりそれにつかつた。——夕方の道路の遠くにその姿を描くことは、家じゅうのあちこちに動く影と同じくらいに珍らしくなかつた。二つ枕をならべた押し絵のような夜の静かき、殆ど同じくらいと言つていい世にも稀れな二つの寝顔、お俊はきよ子の方を向いて凝乎じっと澄んだ眼をすえた。——二つの寝顔は瞳を開けてそして寢床に入った暫らくの間を時々くすぐり合つたり、手や足を引っぱつたりして起きていた、……かれらのそういう清い睡眠前の三十分に親鳥のように羽根をひろげたお俊は、ふざけている姉弟にときどき縫い物の手をやすめながら、優しい声で叱つて見たりした。

「もういい加減にしておやすみ、あした又早いですから。」

姉は困ったような顔をして、くすくす笑いながら言った。

「貞ちゃんがいけないんですもの、ほら、又。わたし言いつけてよ。」

が、小さい弟はすぐ夜具を上からかむって了って、夜具の中からきよ子の足を引っぱったりした。おやすみ、ほんとにねるんですよ、そうお俊はそちらを向かずに言っただけに何か心に柔らかいものの、類いなく静かな落着いた夜の時間をかんに感じていた、……だが、一たい、それは何処どこへ行ってしまったのだろう、小さいいびきがきこえる、一人きりのいびきであった。お俊は嘆息をした。暗い夜路の両側に生えた枯草が見え、そこを小さいむすこがやはりとぼとぼと歩いて行った。いくら考えても、又諦あきらめても既に忘れ

かかっているがらむすこの暮れ沈んでゆく姿が見えてならなかった。お俊の習慣的になつた妄想はむしろこの荒涼な風色の間に見えるかれの姿を、自ら描いて楽しみ淋しむの思いが、完全なまでにこのごろは待たれるようになった、自分もあのあとに尾いている、一しよに歩いているのも、あれはそれを知っている、知らずにいる筈はない、しかも、きよ子も何時の間にか逢いながら話しているのではないか？——こうして吾々はみんな会つてるのだ、そんなに悲しんだりなぞしていない、……又、むやみに寂しがつてはならないと思つた。

「よく来てくれたわね。」

お俊は明るい茶の間で坐っている小さいむすこの頭をなでた。気のせいか髪までが、こわくなっているようだった。それにからはどれだけでも肥っていないのに、顔だけがませているようであった。

「お母さまはずいぶん永い間待っていたの。ほんとはよく来てくれたのね。」

むすこはちよこなんと坐つて、ただ、うんうんと返辞をしているだけであつた。あまり母親の眼を見ない、つとめてそんな機会を避けようとしているらしかつた。お俊は丸い小さい手をさすり

ながら、

「お前はたんとお話がたまっているでしょうから、お話し。あれからお前のしていたことや、見たこと、それから外にまだ沢山あるでしょうから。」

むすこは黙って折々時計をながめた。むかしから下っている時計が物憂く動いて音を立てていた。

「お前はしかしどこから来たの。それを言つてごらん。」  
「あそこから、——」

むすこは初めて返事をして、ちよつと右の手の指を通りの方へさした。母親は顔をよせてもう一度たずねた。

「あそこつて、何処、川原かい。」

「ええ、川原。」

「川原のさきはどこを歩いたの。崖の上なの。」

「いいえ。」

「土手からかい。」

「ええ、土手……。。」

「それから先きは？」

むすこは「それから先きは忘れてしまった。」

と言った。全く忘れてしまったようなけろりとした顔貌であった。

「だってすぐ土手の上へ出られやしないでしょう、ものに順序があるものよ、たとえば川の上流からとか、かみの崖から下りて来たとかいう道順があるものよ、それをお母さまに聞かせて頂戴。」

「それは忘れた。」

「ほんとう？」

「ほんとに忘れた。いつでもぽつかりと土手の上に出るの、そのさきは歩いていたのか、歩いていないのか僕にはわからないの。歩いていたようにも思えるし、また、歩かなかつたようにも考えられるの。いきなり何時でもひよっこり土手の上に出てくるだけなの。」

お俊は或いはそうかも知れないと思った。この子は頭にあるだけの記憶を話しているのらしい。この子はうそを吐くことは無い、そう思った。しかし何故に忘れる事があるのだろう、みんな覚えていそうなのに、——お俊は物珍らしそうな顔つきでまた尋ね出



した。

「お前はへいぜいどんなところにいるのか言つてごらん、お前  
いるところの、いろいろなお前に覚えのあるお話ですよ。」

むすこはふしぎな顔をした。

「僕のいるところつて今ここにいるんじゃないの。僕へいぜいど  
こにもいはしないですよ、今ここにいるだけなの。」

お俊はちよつと冷たい汗を掻いたが、「じゃあ、いまの前はど  
こにいたの。お母さまにあう前のことですよ、よく考えて言つて  
ごらん。」

「それは忘れた。覚えがないの。」

「へんね、——」

しかしこれは本統ほんとうかも知れないとも思われた。ただ、ふいに此処ここにいるという事はうそではなかった。そのさきを覚えていないことも、ありそうな事に考えられた。あるいは夕がた電燈が点いてくるように何も彼も一時に考えがついてくるのかも知れないと思われた。

「それではお母さまの顔をよくおぼえてお出だね、やはり忘れてしまわなければならぬのに、——」

「きゆうに思い出すんですよ、へいぜいはやはり忘れているのかも知れない、ただ、ほかつと思いつく。」

「じゃお家のひとはみんな覚えておいでだろうね。」

「ええ、一しよに思い出してくるの、順々にね。」

お俊は今さらのように一つ一つ注意深くむすこを見つめたが、何一つむすこでないものはなかった。唯、<sup>ただ</sup>全体が丈夫すぎるような硬いかんじがした。敲<sup>たた</sup>いてみたら何か音がしそうに思われ、そしてその眼つきのきれいさも人並外れた澄み方をしていた。「これからお母さまのそばにずっといるんでしようね。お母さまはそんな時を永い間待っていたんだし、お前もそれは知っているんでしようね、だからお母さま一人を置いてどこへも行きはしないでしようね、お前のうちは此処なんだし、別に帰<sup>いく</sup>って行<sup>ところ</sup>処<sup>ころ</sup>ってないわけなんですから何時までもいるんでしようね。」

が、むすこはすぐ返辞をしないで、間を置いてぶつつりと言いきった。

「僕ここにいつまでもいることなんか、できないんですよ、いつの間にかお母さまのそばにいられなくなってしまふの。僕はいたいだけけれどそんなわけにゆかない。」

「でもこのままずっと居ればいいじゃないの。」

「このままいたって僕がなくなってしまうんだし、また、みんな忘れてしまふんだもの、どうしようもない。」

「みんな忘れてしまふ……。」

お俊はそう言つて見て、なるほど、みんな忘れてしまつて、又、かげかたちも無くなつてしまえば、ここに居たつて居なくなつて同じようなものだと考えた。この子はふしぎにそれを知っている。自分というものを能く知つていると思つた。「それにお前はよく

きよ子にあいにくるのをお母さまは知っているんだよ、何度も何度もゆめに見ているの、お前はそんなにして会いにくるのを寂しいと思わない？ お母さまはお前がそう考えて来なくなりはいかたそれが気がかりなんですよ、お前はそんなに会いにこない子じゃないわね。」

「ええ、そりや……。」

むすこは簡単にそういうと母親の顔をまじまじと眺めた。お俊も何気なく見詰め合った。「けれども僕がもう会いにこなくなったらどうするの。」むすこはそう言つて眼を母親から避けようとした。お俊はあわてて遮ぎささえつた。

「そんなことは無い、お前はいつだって居ると言つたじゃないの、

お前は来ようと思えば何日でもこられるんだし、何も彼もお前の  
思うとおりになるようなところに居るんでしよう。」

「いいえ、そんなことはないんです。僕の考えどおりにはならな  
いの。」

「どうしてだろう?——」

「どうしてだか?」

お俊は眼にみえぬものをさぐりあてるように川原の方をながめ  
た。清い空気と、荒い瀬とがあつた。何も眼にうつりそうもなか  
つた。唯、一帯の荒涼な風景の凡てすべから或る広々した思いがした  
ばかりであつた。それとむすことを結びつけて考えようとするお  
俊は、なお落莫らくばくとしたものを感じた。お俊には何事も現実でな

ければならぬ、自分の在るようなところにむすこをもう一度置かねばならぬと考えて見て、呼吸いきづまるような苦しい念おもいがした。そういう考えをもつのはむすこを苦しめるようなものだとも思った。お俊は何かそう考えると、しばらくでもむすこを自分で抱いて、隔れる時間を永びかさなければならぬと考え、そしてむすこを膝の上に乗せ、しっかりと抱きしめた。むすこのからだは温かくほかほかしていた。

## 四

穏やかな秋日和がつづいている、——お俊はきょうも不ふ図ときよ

子が石段のそばに癡づいて遊んでいるのを見た。片側町で人通りもなかった。お俊はしぜんにきよ子の方へ近づいて行つた。

「何しているの。」

お俊はきよ子がぼんやりと坐っている日あたりのいい石段の、  
眩まぶしいくらい白い石を眼に入れた。

「いいえ、何もしてないんです。」

きよ子はあたり前の顔つきで答えた。

「でも一人でそうしているのはおかしいじゃないか。」

「ええ、だからわたし今帰ろうと考えていたんです、ここも段々寒くなつて来たんですもの、それにおさかなが沢山いたのがみんな深い方へ行つてしまつて岸にはいないの。」



「冬近くなるからだよ、そうね、風あたりがずいぶん荒くなってきたようね。お前、こんなに手が冷たくなっているじゃないかね。」

「ええ、さむいから、——」

きよ子は母親に連れ立った。お俊はべつに何も問いもしなかつた。すこしの暇さえあれば石段のそばへ行っているきよ子の心がお俊にははつきり見え透いているだけ、なお、尋ねてはならぬものを感じた。きよ子はふと此こんなことを言った。

「わたしどうしてあそこでばかり遊ぶのかお母さまにおわかりになる、わたしもうすっかり癖になつてしまつたんですもの。へんですかしら。」

「お前のような年ごろには氣に入りの遊び場所があると、そこばかりで遊ぶものなんだよ、お前もきつとあそこが氣に入っているのでしょう。」

「ええ、おさかなもいるし……。」

「そう、おさかなもね。」

お俊はきよ子の心持ちには触れぬことにした。それにしてもこんな小さい魂にこれほどていねい丁寧な用意深い、又、自分だけで楽しんでるような世界があらうとは思えなかっただけ、きよ子の早熟した妄想とでもいうものに、或る不思議な因縁をかんじた。

「それにあそこにいると、毎日、山の上へ来る雪が昨日よりか広がってゆくのが分るの。晩にねるときに明日はどれだけになるだ

ろうと思っていると、手のひらくくくらいに見えたのが、もう二倍くらいになって見えるんですもの。早いものね、しまいに、あれがみんな真白になるわね。」

「え、もうすぐよ、しまいには山肌がみえなくなるほど白くなってしまふんですよ、ほらずっと奥の方にある山があるでしょう。そして兜のような形をしているのが一番さきに白くなるんです。」

「こわいようね。わたしあれを見ると誰かがいてお砂糖を振り撒いているような気がするわ。」

お俊は微笑つて、「もう、じきにこちらにも雪になるかも知れない。」と言った。

二人は自家の門の前まで来たとき、また、言い合したように立

ち止った。向岸に学校がえりらしい子供が一人、道草をしながら歩いて行つた。きよ子はそれを凝乎と見送つている。お俊も目のやり場がなく同じい視線を凝らしていた。ふたりは期せずして何かを思いあててお互いがその心持を隠し合つてゐるらしかった。ふたりは家の中へ這入つたが、きよ子だけ何時の間にか又門の前へ出て佇んでいた。

「ああ、又か？」

お俊はそのうしろ姿を見ながら呟やいて、己れも亡くした子供のことでどうかすると居いたたま耐らない気もちを刺戟されながら、ぼんやり玄関へ出た。まるで絶えず目に見えぬものに静かに呼ばれているような気がしてならなかつた。その子供は雨もふらないの

に田舎の子供らしく傘をひろげ、未枯れた崖の岸を歩いて行った。風があると見え崖の草は葉裏を波がしらのように白く捲き返しながらいらした。

「お前、何をそんなに見ているの、すこし寒いじゃないか？」

きよ子は母親を見て、自分が又佇っているのに赧くなつたが、

「お母さま、あの子は眼がつぶれているんです。」

「目がつぶれている？——どうしてなんです。」

「わたしあの子を知っているの、いつか電車の中でハモニカを吹いていたんです。ほら、よく見ると黒い目金めがねをかけているでしょう、だから初め目が見えないと思っていなかったのです、突然、ハモニカを吹き出したのでわたし吃驚びっくりしてしまつたんです。」

お俊はそう言えばどうやら目金をかけていると思つた。眼のところが黒ずんで悲しげに見えた。きよ子はあの子が電車に乗るとすぐにハモニカを吹くのが癖だと言つた。お俊にはそれがどういう意味か分らなかつたが、その子供が一人、さびしくとぼとぼ歩いてゆくのが眼に残つた。

「それにこの間向う岸であの子が一人で、ふな鮒を釣つていたの。よく似た子だと思つたとあの子は目が見えるような顔をして、弟さんと一しよにいたの。」

「妙な子供ね。」

「あれで糸がぴりぴりすると、きつと分るんでしよう、ほら、足で石を蹴りながら行くでしょう、あんなことばかりしている子な

んです。」

お俊はまだ一度もその子供を町で見たことはなかったが、歩きぶりが目の見えない人のように考え考えあるところがあった。お俊はそれを眺めているのが何故か厭であった。

「お這入り、」

お俊はそう言っておきよを家へ入れ、夕方の、門を閉めた。門や雨戸をしめることにあの子はよく癖づいて泣いたものだと思つた。





# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星未刊行作品集 第2巻 大正※」[#ロ―  
△数字2、1-13-22]」三弥井書店

1987（昭和62）年5月28日

初出：「世紀 第1巻第3号」

1924（大正13）年12月刊

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 童話

室生犀星

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>